

# クレオールの口承説話と 口承説話のクレオール化

三 原 幸 久

筆者は本論文で、主として中南米においてクレオールと呼ばれる混交言語を母語とする民族の口承説話が、中南米の他の民族、即ちスペイン・ポルトガル・イギリス・フランスといったヨーロッパ系の民族の口承説話や、スペイン語でインディヘナと呼ばれる先住民の口承説話と比較してどのような特徴があるのかという問題について考え、それらの特徴を表すために、元来言語学の用語である「クレオール化」という言葉を口承文芸の分野にも使おうと試みるものである。対象地域は主として中南米のクレオールであるが、比較のために、スペイン系の他地域のクレオール、特にフィリピンのチャバカノ語と呼ばれる言語の説話を取り上げたい。

ナナの歌だけは英語らしい感じもしたが、英語をよく知る人も歌詞は全く理解出来なかつた。それも道理、あれは「ジャマイカ英語」と呼ばれるクレオールの一端だつたのである。これはカリブ海の島で生まれ、島々を巡って隠れたクレオールの民謡を採集し、自分で歌うという民俗音楽研究者でもある歌手ハリー・ベラフォンテが見付けて歌つた歌であつた。

ではクレオールとは何だらうか。元来言語学の用語であるクレオール (Creole) を説明するためには、その母体となつたピジン (Pidgin) を説明しなければならない。ピジンとは、お互いに共通の母語を持たない人々が接触してコミュニケーションが必要になつた場合に生まれる母語以外の、ある種の補助接觸言語で、基礎になつた言語を出来る限り簡便化して使用するのが普通である。ハワイにも、明治初期の横浜にも日本語系のピジンがあつたらしいが、その土地の特種事情でピジンが補助言語ではなく、それを日常話している場所では、何世代か後にピジンしか話せない世代が生まれて来る。このように母語化したピジンがクレオールである。<sup>(注)</sup> クレオー

## 1 ピジンとクレオール言語

筆者と同世代の読者には御記憶があるかも知れないが、昭和三二年頃だったか、我が国に「バナナボート・ソング」という歌が流行したことがある。敗戦後、数多くの英語の歌も流行つたが、このバ

ル化 (creolization) とは元の言語あるいはピジンがクレオールになることを意味し、元の言語から見れば構造の簡素化、ピジンから見れば母語化を意味する。<sup>(注2)</sup>

## 2 中南米のクレオール諸言語

広い意味でのピジンやクレオールは歴史上あらゆる時代、多くの

民族・言語に起こったと想像されるが、現在もなお話されており、或いは文献記録が残っているものは大航海時代以後のヨーロッパ人の海外発展の結果である。そのため世界で最ももクレオールを残した元の言語は英語、フランス語、ポルトガル語、スペイン語である。特に中南米は十五世紀末以来スペイン・ポルトガルが、遅れてイギ

リス・フランスの征服侵略の結果、先住民との言語の接触が大規模に起こり、多くのピジンが発生した。更に十六世紀後半にラス・カサス神父らを先頭に、先住民を奴隸として酷使するエンコメンデー<sup>ロ</sup>（初期の大土地所有者）への非難が起こった結果、先住民に代えてアフリカ人を奴隸として大量に輸入することとなり、その結果カリブ海沿岸を中心にアフリカ系住民の大量流入が始まつた。特に奴隸として各地から連れて来られたアフリカ系住民は奴隸主との間ばかりでなく、奴隸相互間のコミュニケーションもままならず、各地でピジン・クレオール現象が起こつた。現在、「クレオール料理」とか「クレオール文学」とか、言語学以外の分野でクレオールという言葉を使うのは、主としてカリブ海のアフリカ系住民の文化を

指して呼ぶ場合が多い。十九世紀後半、順次各地で奴隸解放が行われたが、クレオール言語およびクレオール文化はそのまま生き残り、カリブ海の多くの島々やスリナム、ガイアナも第二次世界大戦以後独立したが、クレオールは民衆の言語としては根強く生き続いている。

次にこの地域のクレオールにどのようなものがあるかを見てみよう。

- (1) カリブ海英語クレオール (Caribbean Creole English) : カリブ海の小アンチル諸島全域に約三〇〇の英語基盤のクレオールがあり、いくつもの変種がある。最大のものはジャマイカ・クレオールで二〇〇万以上の話者をもつ。その他トリニダード・トバゴ、バルバドス、バハマ諸島等。
- (2) カリブ海フランス語クレオール (Caribbean Creole French) : カリブ海の小アンチル諸島全域（グアドループ、マルチニック、ドミニカ、セントルシア、グレネーダ、トリニダードの島々）で八五万人に話されるフランス語基盤のクレオール。
- (3) ハイチ・クレオール (Haitian Creole) : ハイチにあるフランス語基盤のクレオールで、四〇〇万人以上の話者がいる。
- (4) パピアメント語 (Papiamento) : ベネズエラ沖の現在オランダ領であるキュラソー島、アルバ島、ボネール島で使用されるスペイン語基盤のクレオール。ポルトガル語とオランダ語の語彙の影響がある。二〇万人の話者がいる。文学語にまで達したクレオール。
- (5) スラナン語またはタキタキ語 (Sranan-tongo; Taki-taki) : スリ

ナム沿岸部で話される英語基盤のクレオール。スリナムで最も広く使用される約八〇万人の第一言語。

(6) ボッショ・ネガーズ語 (Boschregers) : スリナムで、十八世紀からの逃亡奴隸が奥地に立てこもり、オランダ政府の討伐軍に勝利を収めて自治を認められた人達の英語基盤のクレオール。話者数約三万五千人。サトマッカ (Saramakka)・シヨカ (アウカナーズ)

(Diuka; Aukaners)・ボリ (Boni) の三種族がある。ボルトガル語の語彙の影響がある。

(7) フランス領ギアナ・クレオール (French Guyana Creole) : フランス語基盤のクレオール。ボルトガル語の語彙の影響がある。カイエンヌとその周辺の海岸地帯で約五万人の話者によって使用。

(8) パレンケー <sup>(注4)</sup> Palenquero : ニュンビア・ボリーバル州のサン・パシリオ・デ・パレンケで約二、三〇〇人の黒人系の住民が話すスペイン語基盤のクレオール。クレオールでの出版物がほとんどない。

接触はヨーロッペ人と奴隸として連れて来られたアフリカ系住民との間に起った。口承説話から見た現在のラテンアメリカの状態はおおまかに見て次のような四つの区域に分けられる。

A 地域 (先住民型) —— コロンブス以前の先住民の口承説話は、いわゆる神話・伝説のみで、ヨーロッパ的な分類による昔話はなかったものと推定できる。現在でも比較的ヨーロッパ文明の影響の希薄な地帯の口承説話は、昔話を欠き、土着の神話・伝説のみが存在する——多くの先住民居住地域がこれに該当する。現代まで先住民の文化が残存し得たのは、概して交通の不便で、天然資源の乏しい僻地である。この地域と次のB 地域の違いはヨーロッパ系の人々との接触の濃淡と同時に、先住民の文明度の高低によると思われる。

中南米ではこの段階の民族の神話伝説が一九世紀以来最もよく収集され研究されていると言える。多くの民族学者と共にベネズエラに於けるカプチン修道会、ブラジルに於けるサレジオ修道会等の宣教師の活動も重要である。英訳ではあるが米国カリファルニア大学ラテンアメリカセンターカラシリーズとしてモチーフ索引を付したまとまとめた出版があり、また米国系の「夏季言語学研究所 Summer Institute of Linguistics」が、少数民族の言語と神話伝説を収集出版している。

### 3 中南米全体の口承説話の状態

中南米はコロンブス以後、比較的短い期間（一四九二年からおよそ一世紀の間）に全土がスペイン人、ボルトガル人によつて征服された。これほど広い領域が文化のほぼ類似した両民族に征服され、広範な文化接触が起こつた稀な例である。文化接触は必ずヨーロッパ人と先住民（インディヘナ）との間に起り、次いで第二の文化

B 地域 (先住民・ヨーロッパ混合型) —— 口承説話のうち昔話をみスペイン・ボルトガルのものを受け入れ、神話伝説は土着の要素を残す。これは征服された時、既に国家を作り、農耕を知るなど、比較的高文明を享受していた先住民に起つた現象である。これら

の地方は耕地も人的資源も豊富であったので、ヨーロッパ人の侵略と開発の第一の目標となつた。メキシコのアステカ族・マヤ系諸族、グアテマラのマヤ系諸族、ペルーのケチュア族、ボリビアのアイマラ族、ケチュア族、チリのアラウカーノ（マプーチェ）族、パラグアイのグアラニー族等がこれに該当する。既に米国のフランツ・ボアズが北米の先住民について、チリのロドルフ・レンスがアラウカーノ族について、現存する昔話的説話の大部分はヨーロッパ系のものだと指摘している<sup>(注6)</sup>。ではどうしてこれらの諸民族がヨーロッパの昔話を取り入れたのかについては、知識を教えるための神話伝説ではなく娯楽のための昔話を欠いていたからだとしか言いようがない。アイマラ族やグアラニー族を除いて比較的良く採集され研究されている<sup>(注7)</sup>。

#### C<sub>1</sub> 地域（ヨーロッパ「クリオーリョ・メスティーソ」型）——これは主としてスペイン・ポルトガルからの移民の子孫（クリオーリョ）と先住民との混血者（メスティーソ）が人口の大半を占めている地域（アルゼンチン・ウルグアイ・チリ・コロンビア・ベネズエラ・ブラジル南部、コスタリカ等の大部分）がこれに含まれる。

口承説話全体にわたってスペイン・ポルトガルのものを受け入れており、伝説もキリスト教的なヨーロッパのものと同じ話型である。ウルグアイ・コロンビアを除いて比較的昔話の採集研究が進んでいる。

#### C<sub>2</sub> 地域（ヨーロッパ・アフリカ混住型）——かなりの割合のアフリカ系の住民とメスティーソが混住している地域（ブラジル北部、

キューバ、ドミニカ共和国）、アフリカ系住民が大多数を占めるがクレオールを生み出さなかつた地域（パナマ、ペルトリコ島）もこの地域に入る。C<sub>1</sub> 地域と同様、口承説話全体にわたつてスペイン・ポルトガルのものを受け入れており、伝説もキリスト教的なヨーロッパのものと同じ話型である。いずれの地域も比較的昔話の採集研究が進んでいる。特に米国領であるプエルトリコ島ではある分野の口承文芸の研究が進んでいる。

D 地域（クレオール「アフリカ」型）——言語がクレオール化したアフリカ系住民が住む地域で、カリブ海域の諸島と南米北部旧ギアナ地域が中心であるが、コロンビア海岸部やコロンビアの太平洋岸島嶼部もこれに入る。この地域での口承説話の状態がどのようにあるかをこれから検討してみたい。

### 4 クレオール地帯の口承説話の採集記録

言語学の分野のみならず、口承文学の分野でもクレオール地帯は一般的に研究が遅れていた。ここでもクレオールとは正統ならざるもの、「純粹性や白さや本質性の欠如<sup>(注8)</sup>」と考えられていたのである。しかし元々クレオールは話し言葉として生まれたものであり、現在世界のクレオールの中で文学作品が生産され続いているのは先ずキュラソー島のバピアメント語、次いでハイチのハイチ・クレオール語であろう。しかしこの両語とも正字法はなく、詩人や文筆家は

それぞれ自分の好みのスペルで作品を書いていた。

少し古い資料ではあるが、『ジョン・クレオール言語文庫目録』（注4引用書）によれば、クレオールで書かれた新聞も文学作品も皆無のクレオール諸語は数多くある。ロロンジアのペンシケーロ語などは正字法どころか、文字に書かれることも全くなかった。しかし、クレオールの文学は語りの中にしかないとされ、また、アメリカでの民俗学の発達により、先ず米国内の先住民の説話が、次いで南部のアフリカ系アメリカ人の説話、そしてペニンスルヴァニアのドイツ系・ニューヨークのスペイン系・ルイジアナのフランス系等イギリス以外の出自のアメリカ人の説話が採集され、最も近くにある外国として、メキシコと共にカリブ海地域の島々がフィールドに選ばれることとなつた。幸いなことにこの段階で採集された、クレオールの説話（や諺、謡々、民謡等）のテキストは、言語学的な考慮が払われてるので正確である。ただ、最近のオランダでの状態は知らないが、管見に入った限りでは、ペントメント語の説話の採集・報告が少なく、ボッショネガーケ語やペーンケーロ語の説話の報告は全くないのが残念である。以下にトチハ・アメリカのクレオール語の主要な口承説話集を挙げてみよう。

〔小アンチル諸島（英語・フランス語クレオール）〕

• Parsons, Elsie Crews, *Folk-Lore of the Antilles: French and English*, 三巻、米國民俗学会雑誌別巻、一九三三—三四（第1'—11巻に島毎のクレオール語のテキスト、第三巻に話題別の英文レジメと譜、譯）

「ジャマイカ」

• Beckwith, Martha Warren, *Jamaica Anansi Stories*. 米国民俗学会雑誌別巻、一九三四（英語・因九語、世間語、諺、比較研究上の注）

• Beckwith, Martha Warren, *Jamaica Folk-lore*, 米国民俗学会雑誌別巻、一九三八

〔バハマ諸島〕

• Edwards, Charles L., *Bahama Songs and Stories*. 米国民俗学会雑誌別巻、一九四一（民謡・英語）

〔ハイチ〕

• Sylvain, Susanne Cornhaire, *Creole Tales from Haiti*. 米国民俗学会雑誌、五〇卷、一九三七—一〇〇七—一〇六頁・五一卷、一九三八、一一九—一二四六頁

• Hall, Robert A., *Haitian Creole*, 米国民俗学会雑誌別巻、一九三三

〔カリブ海一帯〕

• Geerdink, N. M. & Jesurun Pinto, *Cuentanaran de Nanzi*. (トーナンゼー語) Curacao, 一九六五（英語）○語、英訳として同じ著者の *Nanzi Stories*, Curacao, 一九七一がある

〔ベニス〕

• Herskovits, Melville J., & F. S. Herskovits, *Suriname Folklore*, Colombia Univ., 一九三七（一四八語のタキタキ語と英語の対訳の書）語、諺、諺、サリマック語の諺、夢、民謡を含む

〔南北カリブ諸島〕

Friedemann, Nina S., Miss Nansi, Old Nansi y otras narraciones del Folclor de la Isla de San Andrés, Colombia. (『ミス・ナンシー、オーハム・ナンシ』の他の『ロハシト・サン・トナドレス島の民俗的説話』) ロロンシア民俗学雑誌 五十九号、一九六四(五話のクレオール英語とスペイン語との対訳の昔話)

なお、必ずしもクレオール語の説話とは限らず、アントリコや「ニカラ共和国を含めたカリブ海地域の西インド諸島の説話の話題目録」として、次のものがある。

Flowers, Helen L., *A Classification of the Folktale of the West Indies by Types and Motifs*. Arno Press, New York, 1980.

## 5 クレオール地帯の口承説話

ではクレオール地帯の口承説話にどのような特徴があるかを考えてみよう。アフリカの人々が奴隸としてアメリカ大陸に連れと来られた時、故郷のアフリカの文化はどうなつたであろうか。抑圧された要素、変質した要素が多く、原形を保つたまま新大陸に持つて来られた要素はほんの僅かであったと考えられる。信仰、音楽、家族意識等は原形を保つたと思われるが(カリブ海沿岸やブラジル東北部に見られるアフリカ系の新興宗教—ヴードウやマクンバーや、独特的の楽器・リズム、子供の養育に果たす母系的要素等がある)、説話については、前章の収集で見る限り、構成要素についてはアフリカのものが色濃く現れているが、モチーフや話型については

殆どヨーロッパのものをそのまま取り入れている。その理由は、クレオール言語を生み出した理由すなわち、アフリカの異なる民族・部族から連れて来られた奴隸達の間のコミュニケーションの極度の困難さは、当然、言語を媒介とする説話の伝承が持ち込まれたとは考えられず、説話は全面的に農園主であるヨーロッパ系のものを取り入れたのであろう。ただアフリカの広い範囲にわたって共通に存在していた構成要素のみは説話の中に取り入れることが出来た。アフリカに普通でカリブ海沿岸に生息しないヒョウやハイエナが説話の中に存在することがあるが、それもライオンや虎に置き換えられることがある。ヤム芋もアフリカ的要素で説話の中に現れている。しかし他のいかなるものよりも特徴的なのは独特的のトリックスター(狡猾者)の存在であろう。たしかにクレオール地帯では(ラテンアメリカの他地域の説話以上に)笑話、特にトリックスター説話(狡猾者譚)が非常に発達しているが、その登場人物は特異である。今クレオール地帯独特のトリックスターを挙げてみよう。

まず第一にクモである。それは「アナンシ Anansi」或いはその音韻変化によって起きた形を取っていることが多い。例を挙げる。と、米国サウスカロライナ州のサン・アンドレス諸島では Miss Nansi' シー・アイ・ト・ム島の Aunt Nansi' シャマイカ島の Anansi' キンセラム島の Brie Nancy' ト・ム・イ・グア島の Bra Nancy' ネガイ・ス島の Bru (Brer) Nancy Nancy' Bru Annancy' キッソ島の Bra Nancy' ヤム・ヌースティシャス島の Ber Nancy' サバ島の Bluh (Brer) Nancy' ヤム・ヌー・マー・ヤー・ム島の Ahnancy' や

ハル・ヒロイ島の Bu (Ber, Bru) Nancy' ャノル・ルマベ島の Blu Annancy' ルコリダル・島の Nancy' ャノル・ザイナヤン・ルマベ島の Ba Nancy' セント・バント・島の Be Nancy' キョトハ・ルマベ島の Compa Nansi・Braha Nansi' サン・アノル・ルマベ島の Beda Nansi' ベリナム G Anansi' ハロ・ラ・バホチ ハ州のアフリカ系住民 Anance・Anancio・Anancito 等がある。

トナンシとはもと西アフリカ・ガーナのアシャンティ族の Ananse がひ來たと言われてゐる。アシャンティ語ではこの語はクモを表すと共に、神話では最高神 Nzambi の娘である Mpunga (大地母神) の元から火を盗んで人々に与えた文化英雄であった。クモが文化英雄になつた理由としてはトーテム動物としてのクモの勝利を表すとか、巢の中央にいるクモは人間に生命を与える太陽の象徴であるとか言われている。(アフリカの他の民族では亀やジャッカルがクモの役割を果たしていた) クモは西アフリカの海岸部全体でトリックスターの役割を果たすことが多かったので、アシャンティ族では昔話を全て Anansesem (クモ話) と呼んでおり、隣のアカノ族でも Kwaku Ananse と呼ぶ、またハウサ族でもクモ Gizo は説話の主人公である。カリブ海の昔話でも同様にナンシがあまりにも有名なので、キュラソー島等では昔話のことを「ナンシ話 Cuenta di Nansi」と呼んでゐる。G Ananse の知識は奴隸と共に新大陸に伝えられたが、信仰を失つて神話としての機能は失われ、その性格も変わり、狡猾者へと変質した。歐州起源の昔話が語られるようになると、その狡猾者の名前としてアナンシが使われるようになった。

古態を保つキュラソー島では、まだアナンシがクモであるとの知識はあるが、昔話の中ではそれと関係無く人間としての活動をしていふようである。人間である時は、大体男性(概して貧乏人)であるのが普通であるが、セント・マーティン島のアナンシは女性(トウクマの妻)とされているし、サバ島では対抗者が王やライオの時は男性であるが、トウクマの時は女性(妻)とされていて両性具備の形をとる。よく Anansi の対抗者として現れて来る「トウクマ Tukuma」の如きの、アシャンティ語で別種のクモ Ntkuma であると謂われてゐる。なおこれらの名前の前に付く Bre, Ber, Bra, Bu, Beda 等の接頭語は英語の brother のクレオールの発音であり、同様に Compa とか Compai 等の接頭語はスペイン語の compadre の タレオールの発音で、正確にはカトリックにおける実父と名付け親との間の呼びかけであるが、普通には「仲間」と訳せるような語である。

ただ、ナンシはタレオールの昔話の中で、単に狡猾者や頓知者として行動するだけではなく、あらゆる昔話の中で主人公として現れる。たとえばジャマイカの AT 二〇三〇番に相当する累積譚(だんだん話・もちろんヨーロッパ系である)でも次のようにアナンシが主人公になっている。

アナンシは市場の掃除人として働き、給料をもらつて豚を買いつれて帰るが、途中で豚が小川を渡らうとしない。アナンシは犬に「豚に咬み付いて小川を渡しておくれ」と頼む。犬が断るので、今度は棒に犬を叩いておくれと頼む。このようにアナン

シは犬、棒、火、水、牛、肉屋、綱、脂肪、鼠、猫と順に頼む。なおクレオール地帶ではないがコロンビアのベホチヨ州のアフリカ系の昔話ではナンシとは呼ばれないクモが、兎やアナンシと並ぶ名の貧乏人と共に狡猾者として活躍している。

「番田」にクレオールでよく現れるトリックスターは「兎」である。

これは特別の名前は持たず、英語系のクレオールではトロット

Rabbit' ハランス系のクレオールではラパン Lapin と呼ぶ。例

ふば、ジャマイカ島ではB' Rabbit' ベハマス諸島ではB' Rabb' ネ

ガイバ島ではBru Rabbit' ジャム・キッソ島やアンギラ島ではBrer

Rabbit' ジャム・ヒューバ島ではBo Rabbit' ジャム・ヒューバティ

ジャバ島ではBer Rabbit' ジャム・シルシ島ではBe Rabbit' と呼ばれ

る。ハランス語系では、セントルシア島' レ・セント諸島' グアダ

ルード島' マリー・ギャラント島' などカ共和国ではLapen' ルリニダム島' マルチニック島' などカ島ではCompé

Lapin と呼ぶ。これもやはり西アフリカ起源のものであり、く

ネバニア・ロロニエトと書いたスペイン語の昔話の中にもTio

Conejoとして現れ、米国南部にもアフリカ系住民の間に分布して、

十九世紀チャンドラー・ハリスの『アンクル・リーマス物語』のよ

うな書かれた文学として有名な昔話を生み出したといつた。<sup>(註)</sup>

三番田のトリックスターは「山羊（羊）」である。これは僅かにグ

アダループ島' Cabuite' ジャム・キッソ島ではBra Sheep' ジン

・クロイ島ではBo Goat として現れる。

四番田のトリックスターは「亀」である。これは西アフリカでも

トリックスターとして知られている動物であり、グラジルの先住民の昔話にjabuti（陸龟）としてトリックスターによく現れるが、クレオールではネババ島' Brer Turtle として現れるだけである。

その他、起源不明なのは、ハイチにBukiとの対抗者として現れ

るMalice（悪者の意味）、グレンナディン島に現れるComp Zaien 、 Zaen やある。

これらのトリックスターはいずれも、通常の手段では勝てない強い力を持つ相手を智力で倒して聞き手の喝采を浴びる。この敵役にも幾つかのものが良く現れる。先ず(1)虎（ジャガーのいと）、狼、ヒョウ、ライオン（ヒョウのいと）、狐のようだといひでも見られる強い動物である。(2)国王、魔羅等の王道的な強者。(3)しかしその他にカリブ海のクレオールに独特な敵役がいる。

(i) Tukuma またはタカの変種である。これはナンシともいふセント

で現れる。名前も、ジャマイカ島 Tacoomah' ジャムセント島

Terrcooma' Terracoma' トトタカ島 Atookenaha' ネババ島

ヒューブル (Bru) Tacoma' ジャム・ヒューブル島 Brer Tookerman' ジン

・ヒューブル・イシヤバ島 Ber Tookerman' ジバヒューブル島 Buh Tookerman' ジ

・ム・ヒューブル島 Bru Tacoma' ジャム・クロイヒューブル島 Brer Tookerman' グ

レナティヤバ島 Atoukooma' ジャム・ヒューブル島 Tukemah 等である

のである。前述のように別種のキャラクターである。役割はナンシが悪賢い者である時は愚かな乱暴者である。対抗者というのが普通であるが、キュラソー島ではナンシの友人、アンティグア島で

はナンシの息子、セント・キッツ島ではナンシの兄弟、サバ島やセント・マーティン島では女性のナンシの夫となつてゐる。

(ii) Bukiまたはこの変種。ジャマイカ島では'Bouki'、ベハマ諸島ではBouki、ハイチではBouqui'、ドミニカ共和国ではBuquiと呼ばれ、ジャマイカ島ではアナンシの、ハイチではマリスの対抗者となつて現れる。

(iii) Zombiまたはばいの変種。グアダルーペ島でZamba'、セント・ピーターズ島でZamba'、セント・カ島でCompé Tigé・Zombi・Zambaとして現れる。「バンビ」はボニー映画で有名になつたが、元々ばいの地方のクレオール系住民の信じる超自然的存在なのである。

話型としては、既に述べたように殆どヨーロッパの話型であるが、モチーフ段階ではアフリカ説話が影響を及ぼしているという報告もある。その中でも有名なものはAT-1七五の「タール人形」の話型である。いたずら兎、アナンシまたは猿がタールを塗つた人形にくつつて捕えられ、虎や狼を身代わりにして逃走する話はエスピノーサの三十六話の類話の比較による地理歴史的研究によつて、発生地がイングランドであり、かつて言われていたようにアフリカではないことが証明されているが、多くのラテンアメリカの類話はヨーロッパ的なモチーフではなくアフリカからもたらされたモチーフを含んでゐる。(註⑨)

次にクレオールの説話の中の神話・伝説の少なむについて考えて見よう。上述の説話集の中の説話は殆ど昔話的なものであり、伝説

的なものは少ない。そのよんだものと意識的に採用していないといふ考えられるが、Parsons & Beckwith' Herskovitsの収集には民謡、諺、謎、夢判断まで含まれてゐるが、神話は含まれてはいない。

だヨーロッパでは昔話に含まれない起源譚(なぜ話)「例えは、死の起源(ハイチ)、魚の創造(ベハマ)、風の創造(ジャマイカ)、蛇の頭は何故小さいか(マルチニック)、孔雀の羽根の起源(グアダループ、ハイチ)等」はクレオールの説話の中に相当含まれている。

昔話の開始の句、終わりの句は、日本やヨーロッパの昔話でも本当に衰えているが、クレオールの昔話でもかなり少なくなつてゐる。しかし島により、若干の形は残つてゐる。例えば

(ジャマイカ) ·Jack man dora (dory):

·Jack man dory! Dat's end of de story.

·Jack man dory fe da!

·Jack man dora, choose one!

·Jack man dory, this story done!

(ベハマ諸島) ·E bo ban, my story's en' / If you doan' believe my story's true, / Flax my captain an, my crew,

Vw'en I die bury me in a pot o' candle grease.

(グレナダ、マハーランド) ·And the wire ben' / And the story en'. (鉛金ばくがく、話は終つた)

(ヤンマ・ジャノマ) ·Jump and the lead bend, / And the story end. (轟お山がひし纏は曲がり、話は終わつた。)

(セハ・ム・ハト) - Cri, cri! Mon bonne, Dé' fois, trois fois belle

conte bien'aconté. (クリ・カ・クリ・カ、あなたが  
お話し始めた)

〔註1〕(車の曲)語を語りしよおくれ)

(ト・ハ・ギ・ハ・ト) - An' de wheel ben' / An' de story en'. (車は曲が  
り、語は終わった)

ただスリナムの昔話ではある場合にはかなり形式が残つてゐる。

普通の昔話の開始の言葉は二つある、一つはEr, tin, tin. もあら、」

れに聽衆はTin, tin, tin. と答へる。それらの言葉は翻訳不可能な掛け声である。第二はKri, Kra, ibri wan man na mindri hem kraka. (カラ・カラ・みんなおもえんじてんねかこ) である。

Herskovitsは次のような語り出しの作法を記録している。なおこの「カラ・カラ」はハイチでも昔話の語り始めの句となつており、<sup>(註2)</sup>

基本的にはフタノベ語から入つたものである。

◎ (聞か手) Kri, kra! (語り手) Fa yu tak? (何をお聞きたいのか  
ね?) (聞か手) Mi ben dape. (私があなたよ) (語り手) San

yu si? (私は見たんだよ) (語り手) A sa go? 選んでやるから~ (語り手) A mus ka go!  
(進むよ)

終わりの句はA tori kaba. (語は終わった。) A kaba. (終わつた。) Na tori com kaba. (やの語はいふして終わった。) 等である。

Herskovitsが二つの開始の句を西アフリカの諸民族の開始の句と比較して伝播を示唆しているが、開始の句や終わりの句の存在は殆

ど全世界的であり、伝播関係の証明はかなり難しげだらう。

別の所でも記したことはあるが、スリナムの昔話の大まき機能の

一つは死者儀礼の時に死者を喜ばすために語られることがある。」<sup>1)</sup>

の点はヨーロッパ文化の伝統ではなく、完全にアフリカの伝統に従つてゐる。タキタキ語の地域、特に首都のパラマリボでは、お通夜や略団に昔語りが行われるが、一番重要なのは「ひと七日 (aiti-dei neti) 「死後の」八日の夜)」である。」の祭りは、日暮れから宗教

的な歌で始まり、途中に「休憩 (prati skratiチ) ハーネートの提供) を挟んで、夜明けまで謎かけ、罰金遊び (賭け) や物まね遊び、昔語りが行われる。特に昔話は死者の靈を喜ばすと言われている。

ボッシュ・ニガーズのサラマック語の地域では、死後一週間死体が、村毎にありdede-wosu (死者の家) に安置されている間、昔話が死者を慰めるために語られる。同様にBeckwithによれば、ジャマイカでも、Anansi Storyはお通夜の間に語られ、Anansiが人の形を取れば、死者の世界で死者のリーダーとなり、昔話の中では動物があれほど活動するのは、死者が動物に姿を変えて動き回つてゐるからだと説明される。昔話をお通夜で語るのは西アフリカの通常の習慣であり、そのため、ケレオール地帯では昔話は昼間に語ることは堅く禁じられてゐるが、これも西アフリカで広く認められてゐる民俗であると謂われる。<sup>(註3)</sup>

## 5 口承説話のクレオール現象とは

クレオール地域の口承説話の状態を独特のものと考えて、筆者は「口承説話のクレオール化現象」と仮に名付けることにした。そこを見られる特徴を詳しく見て行けば、

- 1) その地域の固有の伝承による口承説話の欠如——共通の伝承がないから。
- 2) 神話・伝説の伝承は起源譚を除いて乏しいと考えられる。(時にはそれは旧宗主国の伝説である)
- 3) 昔話はスペイン・ポルトガルのものを完全に受け入れ、変形して(必ずしも単純化でない場合もある)伝承する。
- 4) 本格昔話よりも動物昔話・笑話の伝承が濃厚である。(特に狡猾者諷刺的話柄の伝承を好む)
- 5) 基層文化(アフリカでの出身地)の影響は、話の構成要素、特に主人公に僅かに現れている。

この口承説話のクレオール化現象が決してラテンアメリカにおいてのみ偶然に起きたものでなく、クレオール地帯に普遍性をもつかどうかを見るために、ラテンアメリカ以外のクレオール地域として、フィリピンのチャバカノ語の説話を見てみよう。

フィリピンのミンダナオ島の西北にサンボアンガ Zambanga 市がある。この市には古くからスペイン守備隊の砦が置かれ、この地域は周囲と比べてスペイン化が進んでいた。その結果、この市とそ

の周辺には、一〇万人以上の人々がチャバカノ語 Chavacano<sup>〔注4〕</sup>あるいはサンボアンガ語 Zambangueño<sup>〔注5〕</sup>と呼ばれるスペイン語系のクレオール言語が話されている。外側の住民はビサヤ語(セブアノ語)<sup>〔注6〕</sup>やタウシング語が話され、殆どの市民は母語のチャバカノ語とこれらのどれかとのバイリンガルであるが、教会のミサやラジオ放送や小学校低学年の教育はチャバカノ語が使われている。一九八八年にかけて、日本のトヨタ財團のサンボアンガの州立西ミンダナオ大学への資金援助により、口承文学調査が行われ、あらゆる伝承文学の分野を網羅した『サンボアンガ・チャバカノ口承文学』<sup>〔注7〕</sup>という本文対訳の報告書が出版されている。それによると、昔話十八話は全てスペイン系のものであるが、その中の一〇話には「愚かな者 Si Juan Pusong」(11話)<sup>〔注8〕</sup>、「いたずら者 Si Juan Guachinango」、「怠慢者 Si Juan Plojon」、「怠け者だがずる賢者 Si Juan bien Plojo pero Picardiso」、「正直者 Si Juan de la Verdad」、「トトリ・タンダ Si Juanito Tandan」(以上いずれも「話〔ハ〕」、單に)「トア」(11話)などのように「トア」へと主人公が現れている。この Juan Pusong<sup>〔注9〕</sup>はビサヤ族の伝承昔話における典型的狡猾者の主人公である。またこの書物によると、伝説は全てスペイン系の伝説か、スペイン人のフィリピンへの侵入を扱った史譚である。

このようなフィリピンの状態を見れば、筆者の言うクレオール化現象が決してカリブ海沿岸に固有のものでなく、クレオール言語を使う民族の口承説話全体に言い得るということが理解して頂けるで

あらう。

(追記) いの論文は一九九五年一〇月二八日中央大学駿河台記念館における第三〇回日本口承文化学会研究例会での発表を増補したものである。

### 注

(1) 元来、クレオール（スペイン語ではクリオーシュ criollo）といふ語は「植民地生まれの白人」を意味する語である。いの意味が最もよく残っているのは中南米スペイン語においてであるが、後には、アフリカ生まれの奴隸と区別するため植民地生まれの奴隸をいのようには呼ばれるようになつた。

(2) ピジンやクレオールについての言語学的な詳細は『紅語』一四卷一一号（ピジン・クレオール特集号）一九八五年や『言語学大事典』（大修館）の「ピジン」「クレオール」の項目を参照された。基礎となつた言語の単純化とは、発音の変化のほかに、例えばフランス語・スペイン語・ポルトガル語の場合は、動詞の人称変化、時制、法を表す全ての動詞活用の喪失、名詞の男女の性の区別の消失、單複の数を表す語尾の消失等が挙げられる。

(3) パピアメントやボッショ・ネガーズの言語にポルトガル語の語彙の影響があるのは、南米の開発初期の農園主に信仰の自由を求めて新大陸にやって来たポルトガル語を話すユダヤ人（セファルディー）が多かつたためと言われている。ただ言語においても口頭

伝承においてもスペイン語・ポルトガルの影響を区別するいは現実に難しい。

(4) それぞれのクレオールの話者数の数字は主として John E. Reinecke, *A Bibliography of Pidgin and Creole Languages*, The University Press of Hawaii, Honolulu, 1975 の解説文によつた。

(5) いの題の論説及びそのスケッチは、『民間説話の研究』（一九八七年）中の三原善久「アメリカ大陸——ハトハトメリカの昔話——」三五八—三六七頁を参照された。

(6) Franz Boas, Tales of Spanish provenience from Zuni. (in: *Journal of American Folklore*, Vol.35, No.135, 1922; Rodolfo Lenz, *Estudios araucanos*, Santiago de Chile, 1895-7

(7) ブイマ族では昔話や民謡についてペニョウ・Antonio Paredes-Candiaなどによってかなり採集されてしまふが、固有の神話伝説についての採集は遅れている。グアラニ一族については固有の神話伝説についての収集は多いが、昔話の採集報告は殆どない。

(8) バトリック・シャモワゾー・ラファエル・コノフィアン『クレオールとは何か』平凡社 一九九五二九九頁の訳者 西谷修氏の解説。

(9) いの点で、ドーンが『アメリカの民間説話』で「アフリカ的要素の色濃い西インド諸島、ブラジル、スリナムの黒人歌や物語伝承は南部黒人のものとはほとんど対応するものがない」と示している。（坂本寛春訳 岩崎美術社版 二三〇頁）と述べている点は筆者は同意できない。歌はともかく、昔話は型とモチーフにおいて

完全に一致しない。

(15) Aurelio Macedonio Espinosa, *Cuentos populares españoles* (スペイン昔話集), 第一巻, CSIC, Madrid, 1947.

(11) Cric, crac は物の割れる擬音語らしいが、ハハハでは開始の句からよりは終わりの句に、類似した Tric, trac も共用される。長野晃子「ハハハの口承説話」『ハハハ世界の民間説話』世界思想社 一九八九年九一頁参照。

(12) Herskovits, *Suriname Folklore*, pp.142-146.

(13) 我々日本人にとっては、屋若を語るとのタブーは周知のことであるし、お通夜に昔話を語ることも、岩倉市郎氏の「沖永良部島探訪日記」によく知られており、またモロッコに在住するスペイン系ユダヤ人の間にもあやしいことが報告されている。ラレア・ペラン『セファルディーの昔話(一)』序文、イスパニア昔話研究グループ 一九七一年。まだ、これは説話とは関係ないが、死者儀礼として「博打を打つ」とは、南米のアンデス地帯の先住民に広く見られる民俗である。

(14) フィリピンにおけるスペイン語系のクレオール(チャバカノ語)はこのサンボアンガだけではなく、かつてはマニラ市内のエルミータ地区、マニラ市周辺のカビテ郡、テルナテ郡でも話されていたが、太平洋戦争での被害と戦後の人口分散で殆ど消失してしまった。この地方の口承文芸の報告は殆どない。

(15) Cuartocruz, Orlando B., *Zamboanga Chabacano Folk Literature*, Western Mindanao Univ., Zamboanga, 一九九〇。

(16) 例えど、Benton L. Maxfield & W.H.Wellington, *Visayan Folk-tales*. 米国民俗学雑誌 一九一—一〇卷 一九〇六—一〇年。(みはい・エヌ・アーヴィング／関西外国语大学)